

特別対談

体の中から皮膚に アプローチする漢方の魅力

—美容皮膚科領域における漢方治療の応用—

順天堂大学医学部附属浦安病院
皮膚科 教授
日本美容皮膚科学会 理事長
須賀 康 先生

小田ひ尿器科・ふみこ皮フ科
小田 富美子 先生

わが国における美容医療のニーズは近年、より高まっている。その背景には治療技術の進歩により、比較的低価格で気軽に受けられる施術が増えたことが考えられる。一方で、「心身一如」を基本とする漢方は、体の中から優しくアプローチをする治療法としてわが国の医療に深く浸透しており、美容医療の分野においてもその期待は大きい。

本号では、「体の中から皮膚にアプローチする漢方の魅力」をテーマに、順天堂大学医学部附属浦安病院の皮膚科 教授で、日本美容皮膚科学会 理事長の須賀康先生と、皮膚科・美容皮膚科医療において漢方治療を積極的に取り入れておられる小田ひ尿器科・ふみこ皮フ科の小田富美子先生に、美容皮膚科領域における漢方治療の可能性についてご討論いただいた。

I

わが国における 美容皮膚科の現状

須賀 わが国における美容医療のニーズは近年、非常に高まっていると思います。美容医療というと種々の機器を用いた医療をイメージされるかもしれませんが、「体の中からアプローチする」漢方治療も美容皮膚科の領域では非常に注目されています。

そこで、皮膚科専門医として、美容皮膚科医療に漢方治療を積極的に取り入れていらっしゃる小田富美子先生と、漢方治療の可能性について考えてまいります。

日本美容皮膚科学会の変遷

小田 須賀先生は日本美容皮膚科学会の理事長としてもご活躍でいらっしゃいますが、学会もここ数年で大きく発展していると思います。会員数も年々増加しているのではありませんか。

須賀 現在の日本美容皮膚科学会は、正会員が2,948名(2024年1月末現在)であり、賛助会員も合わせると3,200名を超えています。今や皮膚科領域の学会では日本皮膚科学会に次ぐ規模になっています。このことは、美容医療への関心が高まっていることの表れだと思います。私も本学会


小田 富美子 先生

2007年 兵庫医科大学医学部 卒業
 2007年 愛媛大学医学部附属病院にて研修
 2009年 愛媛大学医学部附属病院 皮膚科 医員
 2014年 日本皮膚科学会認定皮膚科専門医
 2015年 同病院 皮膚科 助教
 2016年10月 小田ひ尿器科に
 皮膚科医師として着任

に長年携わっていますが、皆さんの期待の大きさを実感しています。

さらに、昨年の本学会総会では約3,000人もの方にご参加いただきました。医師だけでなく、看護師さんやエステティシャン等のスタッフの方々にも興味をお持ちいただき、科学に基づいた美容医療の実践に取り組もうとされています。いらっしゃることを感じています。

小田 日本美容皮膚科学会の歴史は非常に古いとお聞きしています。

須賀 本学会の歴史は、安田利顕先生(東邦大学元教授)が中心となって1987年に発足した日本美容皮膚科研究会に遡ります。当時は、“美容医療は二流、三流の医師がやるもの”と揶揄されているような時代でしたが、そのような時代背景にも関わらず、科学に基づいた美容皮膚科の台頭を予見されていたのだと思います。

その後、形成外科学が新たな領域として独立し、さらに日本皮膚科学会がケミカルピーリングのガイドラインや尋常性痤瘡治療ガイドラインを公表したことや、2020年には美容関連の5学会から『美容医療診療指針』が公表されるなど、今に至るまでにいくつもの転換点がありました。また、2007年には美容皮膚科医の育成を担う「美容皮膚科・レーザー指導専門医制度」が発足し、これに呼応するように2008年には「美容皮膚科」が標榜できる診療科として認可されました(図1)。

このような背景で諸先生の関心も高まってきましたし、今後もさらに美容皮膚科は進歩を続け、サイエンスとしての美容皮膚科が定着してくることを願っております。少なくとも、“真っ当な医師がやるものではない”という胡散臭いイメージを払拭し、美容皮膚科のさらなる発展のお手伝いをしたいと思っております。

小田先生は美容医療の領域にはいつごろから携わっていらっしゃいますか。

小田 私は、卒後の研修期間においても美容医療について習うこともなく、保険診療での研鑽を積んでまいりました。ところが、開業後に患者さんの美容医療へのニーズを感じるようになり、それから機器などもそろえて美容皮膚科の診療を行うようになりました。たとえば、湿疹で通院されていた患者さんから、湿疹は治ったけれど「このシミはどうかなりませんか?」というようなご要望を受けることが増えてきましたので、美容医療にも対応できる体制が必要だと思いました。

特に美容医療のニーズを強く実感したのは、新型コロナウイルス感染症(コロナ)の蔓延が大きな契機になっています。コロナを機にスキンケアのニーズが非常に高まりましたし、さらに現在ではマスクを外すようになり、シミやニキビの治療に対するニーズが高まっています。また、脱毛エステのトラブルの報道を契機に、脱毛においても安全な医療へのニーズが高まっていることを実感しています。

須賀 ご指摘のように、美容医療においてコロナが大きな変化をもたらしました。今までは常時マスクを着用しており、口周りのニキビが慢性化・難治化しているというような方が多くいらっしゃいましたが、そのような方が最近に

図1 わが国における美容皮膚科の歴史
美容皮膚科領域の変遷

- 1987年 日本美容皮膚科研究会が発足(安田利顕先生 元東邦大学皮膚科教授、元日本皮膚科学会理事長)。
- 2001年 日本皮膚科学会『ケミカルピーリングガイドライン』が公表された(現在、改訂第3版)。
- 2007年 日本皮膚科学会認定「美容皮膚科・レーザー指導専門医制度」が発足。
- 2008年 日本皮膚科学会『尋常性痤瘡治療ガイドライン』が公表された(現在、尋常性痤瘡・酒皰治療ガイドライン 2023)。
- 2008年 「美容皮膚科」が標榜できる診療科に認可された。
- 2020年 美容関連の5学会から『美容医療診療指針』が公表された。

第42回 日本美容皮膚科学会総会・学術大会

- テーマ: 美の本質を求める
- 会期: 2024年8月31日(土)~9月1日(日)
- 会場: 名古屋国際会議場(愛知県名古屋市中区熱田区熱田西町1番1号)
- 会頭: 秋田浩孝 先生(藤田医科大学ばんだね病院皮膚科)

なってマスクを外すことでご自身のニキビを気にされるということが多くなっています。

ハードルが下がった美容医療

須賀 受診される患者さんに変化はありますか。

小田 まず感じることは、患者さんの幅が広がっていることです。若い方ばかりでなく、お年を召した方も多くいらっしゃいます。また、最近では男性患者さんが増加していますが、中でも若い男性患者さんの増加が目立っています。

須賀 美容皮膚科は今や“特別な医療”ではなくなったということが言えますね。

小田 美容皮膚科のハードルが下がってきたように思います。美容皮膚科への患者さんのニーズは今後も益々高まるものと思います。



須賀 康 先生

1987年 順天堂大学医学部 卒業
1992年 順天堂大学医学部大学院 卒業
1995年 米国テキサス州ベイルー医科大学
皮膚分子細胞生物学に留学
1998年 同大学 皮膚科に留学、
帰国後は順天堂大学皮膚科の講師
2005年 同大学 助教授
2007年 順天堂大学浦安病院 皮膚科学 教授
2009年 順天堂大学医療看護学部 教授 (兼任)

II

美容皮膚科における最新の治療 —古くて新しい漢方に期待—

須賀 美容皮膚科の治療技術も大きく進歩していますね。

小田 枚挙に暇がないくらい、いろいろな技術が進歩しています。たとえば、シミの治療に種々のレーザー機器が登場していますし、ニキビ治療としてマイクロニードルRF、痤瘡瘢痕にピコフラクショナルを用いた治療を行うということもあります。その他、アレキサンドライトレーザーという医療レーザー脱毛機器で、脱毛の波長よりも強めに当てると囊肿型難治性痤瘡が改善したという報告や、肥厚性瘢痕が改善したという報告もあり、実際に私も使用しています。

須賀 美容皮膚科領域では治療技術は新しい機器の開発も含めて今後もさらに進歩していくことが予想されますが、一方で私は漢方こそが美容皮膚科における最新の医療であると思っています。

たとえば、マイクロバイームと皮膚症状との関連が注目されていますが、漢方薬が腸内細菌叢に影響を及ぼすことが明らかにされています。また、尋常性痤瘡治療における外用療法やアトピー性皮膚炎治療における生物学的製剤による治療など、治療薬の進歩にも目覚ましいものがありますが、これらの治療でも治癒に至らない難治例があります。まだ、エビデンスが揃っているわけではありませんが、そのようなケースにも漢方治療が有効ではないかという感触が得られている症例を経験しています。

このように、最新の治療と古くからの医療である漢方を

組み合わせることが、さらに美容皮膚科における最新の医療につながるのではないかと考えています。

小田 ご指摘のように、アトピーの領域でも“腸皮膚相関”が注目されています。また、現代人の食生活の乱れを養生の考え方で是正することもできますね。

須賀 近年注目されているアンチエイジングの分野でも漢方の可能性があるように思っています。今まで“老化”は疾患として認められていなかったために治療対象にはならなかったのですが、ICD-11(国際疾病分類第11版)では老化を一種の疾患と捉えるようになりましたので、老化への治療介入において漢方は最新治療になると思います。

III

漢方治療の可能性

尋常性痤瘡治療における十味敗毒湯

須賀 小田先生は漢方治療の経験が豊富でいらっしゃいますが、実際の効果についてご紹介をお願いします。

小田 私は尋常性痤瘡の治療に十味敗毒湯を使用することが多くあります。

症例1(図2:次頁参照)はクリンダマイシン1%—過酸化ベンゾイル3%ゲル配合剤と十味敗毒湯を2週間併用しま

した。尋常性痤瘡外用薬のみで治療を開始すると、どうしても刺激反応でドロップアウトしてしまう方がいらっ

しやるのですが、治療開始時から十味敗毒湯を併用することで刺激反応もなく、尋常性痤瘡外用薬を継続塗布することができました。

図2 症例1 (20歳代女性)

初診時



14日後



クリンダマイシン1%－過酸化ベンゾイル3%ゲル配合剤とクラシエ十味敗毒湯エキス錠(18錠/日)を併用した。
14日後に頬部前額の赤色丘疹が改善した。

症例2(図3)は前医でクリンダマイシン1%－過酸化ベンゾイル3%ゲル配合剤を2ヵ月間塗布されていた患者さんです。刺激反応がかなり強くて使いにくいということでしたので十味敗毒湯を併用しました。1ヵ月後には刺激反応も消失し、痤瘡そのものも改善しました。

症例3(図4)は過酸化ベンゾイルローションを継続塗布していたのですが、月経前に悪化するという患者さんです。月経前に刺激反応も強くなるし、顔も紅斑と鱗屑でガサガサになるということでした。そこで、十味敗毒湯を上乗せしたところ、1ヵ月後には刺激反応も消失し、月経前の悪化が消失して過酸化ベンゾイルローションの継続塗布もできるということ非常に喜んでいらっしゃいました。

月経前はプロゲステロン優位になるため痤瘡は悪化しますが、桜皮配合の十味敗毒湯はエストロゲン様作用を有しているので、外用薬のドロップアウトを防ぐために十味敗毒湯を投与します。経過良好の方は継続服用していただきますが、飲みにくいという方は月経前の1週間だけ悪化時にのみ服用するように指導することもあります。

須賀 患者さんは十味敗毒湯の服用を続けてくださいますか。

小田 ご紹介した症例はいずれも十味敗毒湯の錠剤(18錠/日)を継続服用していただきました。若い患者さんは漢方の粉薬は嫌がられるのですが、大半の方は“錠剤なら飲めます”とおっしゃいます。また、長期間フォローしている患者さんで、十味敗毒湯の服用を一旦やめてみることもありますが、「やはり飲み続けているときの方が調子が良かった」とおっしゃって、外用薬との併用を再開される方も多くいらっしゃいます。十味敗毒湯の効果を実感されているのだと思います。

図3 症例2 (20歳代女性)

初診時



1ヵ月後

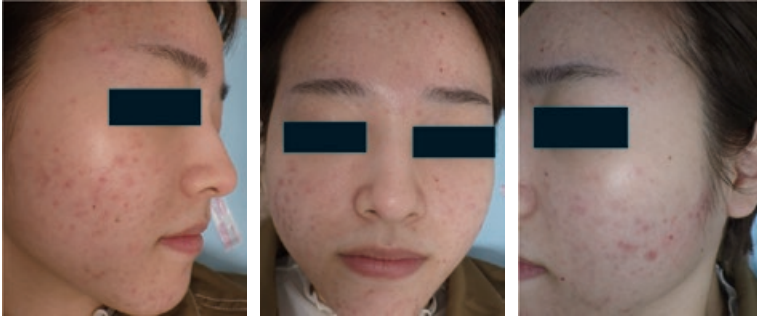


前医よりクリンダマイシン1%－過酸化ベンゾイル3%ゲル配合剤を約2ヵ月使用しているが癢疹と紅斑が続き痤瘡のコントロールも不良。
クリンダマイシン1%－過酸化ベンゾイル3%ゲル配合剤を15分で洗い流すショートコンタクト塗布とし、クラシエ十味敗毒湯エキス錠(18錠/日)の処方を開始した。

紅斑と癢疹はほぼ消失し、痤瘡も改善した。
十味敗毒湯による痤瘡の治療効果と外用薬の刺激を軽減させた症例と考える。

図4 症例3 (20歳代女性)

初診時



月経前10日前から痤瘡が増悪し乾燥や皮脂分泌過剰などの肌荒れも生じる。過酸化ベンゾイルローションとクラシエ十味敗毒湯エキス錠 (18錠/日) で治療を開始した。

2ヵ月後



月経前の痤瘡悪化や乾燥皮脂分泌が軽減し、痤瘡も改善傾向。

須賀 いずれの症例も赤味がかなり改善している印象があります。癍痕を残さないために面皰や炎症性皮疹に対する早期治療の重要性が指摘されていますが、十味敗毒湯で早い段階で炎症を取ってあげることができれば、痤瘡の改善だけでなく、痤瘡癍痕も予防してくれるという利点があるように思いました。

私も十味敗毒湯の効果を実感した難治性の痤瘡患者さんがいらっしゃいます。細菌培養、感受性試験を行ったところ、薬剤耐性のアクネ菌でした。その患者さんに十味敗毒湯を併用したところコントロールできるようになりました。体の内側からと外側からの両方のアプローチによって難治性の痤瘡を克服できた実例です。

小田 十味敗毒湯にはエストロゲン様作用の他にも抗菌作用、抗炎症作用、抗酸化作用、皮脂合成抑制作用などの多彩な作用が確認されています。特に抗酸化作用は美容皮膚科医療においては大変重要です(図5)。

美容皮膚科領域における漢方治療の応用

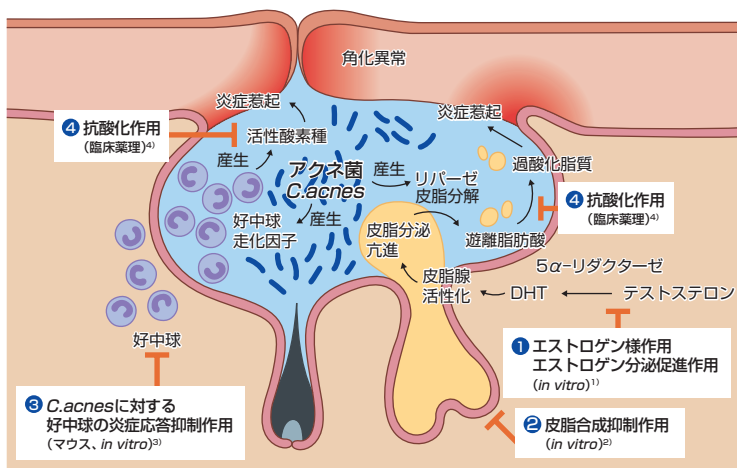
須賀 小田先生は美容皮膚科領域ではその他にどのような漢方薬をお使いですか。

小田 シミの治療にも漢方薬を使用することがあります。漢方的には色素沈着を瘀血ととらえるので、シミの治療に桂枝茯苓丸などの駆瘀血剤を使用しています。皮膚には血流がないので表皮の代謝は真皮乳頭の毛細血管が担っていますが、そこが瘀血状態になると皮膚のターンオーバーや代謝が悪くなりますから、駆瘀血剤の使用は理に適っていると思います。

駆瘀血剤による治療で炎症後色素沈着(PIH)の改善が早くなったというような報告もあります。これらの漢方薬は自費診療となりますが、レーザー治療に伴う炎症後色素沈着の軽減に使用できるかもしれません。

また、西洋医学ではストレスのマネー

図5 尋常性痤瘡に対する十味敗毒湯の薬理作用



DHT: ジヒドロテストステロン

外用薬の刺激症状に対する十味敗毒湯の薬理的効果

参考情報

アダバレンによる紅斑・乾燥・痒痒感を軽減(マウス)⁵⁾

- 1) 道原成和 ほか: 医学と薬学 76: 1449-1456, 2019
- 2) 篠原健志 ほか: 医学と薬学 73: 579-583, 2016
- 3) 千葉殖幹 ほか: 医学と薬学 73: 1265-1273, 2016

参考情報

過酸化ベンゾイル(BPO)誘発性IL-1 α 増加・紅斑を抑制(マウス, in vitro)⁶⁾

- 4) Nomoto M: Altern Integ Med 5: 225, 2016
- 5) 今村知代 ほか: 医学と薬学 73: 1017-1024, 2016
- 6) 張群 ほか: YAKUGAKU ZASSHI 140: 1471-1476, 2020

ジメントが難しいのですが、漢方ではそれができるとい
利点があります。ニキビの患者さんは転居や転職など大き
なストレスがかかると一気に悪化するというケースがあ
ります。漢方はストレスのマネージメントができる柴胡
(サポニン)が配合されている処方があることも大きな利
点です。漢方薬の服用によって体質改善をして、皮膚だけ
でなく体そのものも健康で美しくするというニーズが非
常に高まっていると思いますので、漢方の可能性というの
はますます高まりますし、患者さんのニーズもさらに増え
ていくと思います。

野本真由美先生(野本真由美スキンケアクリニック総院
長)から、「花を綺麗に咲かすのに花びらにビタミンCを塗
るのではなく、土を耕しますよね。漢方はそれと同じで
す」という言葉をお聞きしたことがあります。美容皮膚科
領域でも土(皮膚)を耕す「肌育」が注目されていますが、ま
さに漢方は「肌育」の役割を担うものと考えています。

アンチエイジングと漢方

須賀 近年、注目されているアンチエイジングの分野で
も、漢方の出番があるように思います。小田先生はアンチ
エイジングの観点から漢方をどのようにお考えですか。

小田 アンチエイジングの漢方というと「補剤」がその代
表ですが、その中の一つにフレイル・サルコペニアの予防
や治療介入として人参養栄湯が注目されています。私自身
も疲れた時には人参養栄湯を頓用しています。漢方薬の良
いところは、頓用でも効果を実感できることです。なか
なか服用が難しいという方々は頓用で服用していただ
くことも良いと思っています。

須賀 アンチエイジングとして、美容皮膚科領域で最も簡
単に予防できるのが『光老化』と言われています。これは主
に紫外線が原因ですが、柴苓湯や補中益気湯の予防効果の
可能性が示唆されていますので、“飲む日焼け止め”とし
ての可能性もあるのではないかと期待しています。

また、皮膚の老化の原因に最終糖化産物(AGEs)が指摘
されていますが、真皮乳頭でのAGEsの蓄積を漢方薬が抑
えてくれるようなことも期待できるように思います。

IV 漢方の無限の可能性

須賀 美容皮膚科のニーズが今後、さらに高まってくるこ
とに疑いの余地はないことを小田先生とのお話で確認い
たしました。一方で、美容医療の普及によって患者さん
とのトラブルも増えてくるのが危惧されます。美容皮膚科
の治療による皮膚トラブルに漢方薬を活用することがで
きれば、患者さんとの良好なコミュニケーションにもつな
がると思います。たとえば、レーザー後の色素沈着が収ま
るまでの間に、十味敗毒湯などの漢方薬を使用することも
患者さんとのトラブル回避につながると思います(保険適
用なし)。

小田 先ほども申しましたように、漢方の利点にストレス
マネージメントが挙げられます。漢方の基本的な考え方は
『心身一如』であり、体だけでなく心も整えてくれることが
期待できます。柴胡には抗ストレス作用があるので、十味
敗毒湯はもちろんですが補中益気湯、柴苓湯、加味逍遙散
など柴胡の配合されている処方がストレスのマネージメ
ントにも応用できます。

須賀 漢方でストレスマネージメントができることは、非
常に重要な利点だと思います。ストレス体質の患者さん
には積極的に漢方薬を処方することによって患者さんとの
良好な関係性を構築できると思います。

小田先生とのお話をとおして今後、さらなる発展が予想
される美容皮膚科領域において、体の内側からアプロー
チする漢方には無限の可能性があるように感じました。そ
してアンチエイジング医療における漢方の応用について
も、さらなる検討を進めることが大切であると思います。